

## 海と山の交流を深めて

西浦漁業協同組合婦人部

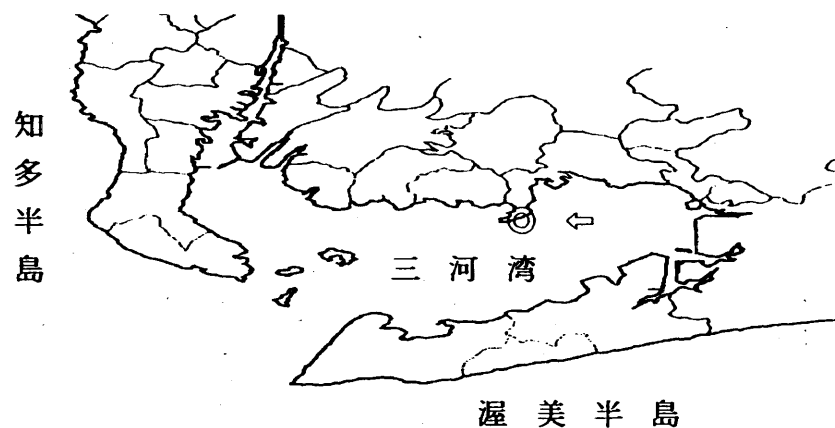
尾崎 八重子

### 1. 地域の概況

私たちの住む愛知県蒲郡市西浦町は、渥美半島と知多半島の間、三河湾中央に位置している。風光明媚で豊かな自然に恵まれた漁業と観光の町である。後方には山を背負い、漁業の他にミカン、繊維、観光の町として発展、市内には西浦温泉を始め3箇所の温泉があり、年間約620万人余の観光客が訪れる。またヨットレースが開催されるなどヨットの町としても知られるようになった。

### 2. 漁業の概況

私たち婦人部の母体である西浦漁業協同組合は、正組合員112名、准組合員223名である。主幹漁業は底曳き網で、主な漁種は車エビ、カニ、タコ、イカ、カレイ、トリ貝等で年間10億円程度水揚げされている。



### 3. 研究グループの組織と運営

私たちの西浦漁協婦人部は昭和60年に結成され、現在部員は59名である。母体漁協の貯蓄・共済等推進への協力、地元主催の農林水産祭への参加による魚食普及活動、料理・健康管理等講習会を実施している。

#### 4. 研究・実践活動課題選定の動機

私たちの主幹漁業は小型底曳き網と沖合底曳き網漁業である。昨年トリ貝、沖ニギス等が豊漁であったが、食べ方を知らない人が多いためか価格は低迷した。そこで婦人部では料理方法などをもっと広め魚食普及活動を強化しようと考えた。少しでも多くの消費者に情報を伝え魚食の輪を広げようと地元だけでなく外にも目を向けることにした。食卓を預かる女性と直接交流をもつことで「魚」をピーアールすることを考えた。「協同組合間提携」ではないが、海から離れている農村や山村の人々に「魚」を紹介したらどうかという話が持ち上がった。「魚」だけでなく「海」や「漁業者」の生活を紹介する機会にもなるし、相手方の食生活や活動等を学ぶこともできる。また、よく考えれば「水」を通じて農村も山村もつながっている。お互いの立場や抱えている問題を話し合う機会を持つことで理解も深まり、人とのつながりもでき、楽しみながら業種や地域を越えた協力の輪が広がることを願い活動を進めることにした。

#### 5. 研究・実践活動状況及び効果

昭和60年から毎年2月に地元の蒲郡市主催の農林水産祭に参加し、地元産の魚介類を販売している。ただ魚を陳列するだけでなく、それぞれの魚にあった調理方法を紹介したり、さばき方を伝授したりして、訪れる人たちに地元の魚をピーアールするとともに、テーマを決めて市民サービスコーナーを設置、一般市民に無料配布なども行っている。また会場に集まった人たちの目の前で地元特産、沖ニギスを使った団子汁を作り、試食してもらっては感想を聞いたりもしている。

このような活動を見ていただいたのか、6年前、長野県売木村の女性たちとの交流会の話が持ち上がった。交流会という言葉にも慣れていない私たちにとってどのように接したらよいのか少々戸惑ったが、新鮮な魚貝類を食べてもらい、お互いの婦人部活動を話し合うこととした。

交流会の当日、50名ほどの部員さんが来てくださり、活動内容を紹介しあった。ちょうどシャコ漁の時期であったので、シャコを食べながらのざっくばらんな交流会となった。仲良くなるいちばんの早道は一緒に食べることだと言われるが、漁協婦人部員がシャコの上手な食べ方について説明し始めると、あちらこちらで話がどんどん広がっていった。この頃にはお互いの緊張もほぐれ、海や山の話に花が咲き、あっと言う間に時間がたち、おいしさも手伝ってか「海」に興味を持ってもらえたようであった。

その年の秋には、長野県の普及員さんから農産物祭への参加要請があった。開催地の高原は紅葉の真っ盛り。農産物や手作りのりんごジュース、味噌、こんにゃく、団子などが並べられ人出も多く賑やかな祭であった。私たちは西浦から持ち込んだ鮮魚の販売とニギスの団子汁を大鍋いっぱい作った。見物客が大勢見守るなかでニギスをおろしてすり身にし、野菜と合わせて団子にしていくと見物客から声がかかり、会話も弾んだ。出来上がる頃には大勢の人が列を作って並び、初めて口にする団子汁に舌鼓をうって喜んでくれた。試食の列がとぎれるころには西浦から持ち込んだ魚も完売し、海では見られない紅葉の美しさを眺めながら、開催地の皆さんと労をねぎらいあった。今も年に1～2回の交流が続き、部員どうし個人的な交際も続いている。

その後、売木村の隣町の婦人グループとの交流会が実現、特産物を使った料理を一緒

に作るようになった。3月であったのでトリ貝炒り混ぜご飯、ニギスの団子汁を作ることにした。トリ貝は殻ごと持って行き、身をむくところから始めた。昔懐かしいそばがきやこんにゃくなど、海で暮らす私たちには珍しいもので歓待して下さり、終始笑い声の絶えない料理交歓会となった。ふるさとの味の研究や草木染め、つる細工など山の暮らしの良さを生かした幅広い活動が紹介され、私たちは、漁業者の暮らしや海を汚染から守る活動のことなどを紹介した。ゆとりが感じられる山間部の人たちに大いに刺激を受け、海産物の即売を大変喜んでもらったことに充実感を覚え、もっと多くの人に新鮮な魚のおいしさを味わってもらいたい欲が出てきた。

楽しみながらの農林水産祭や交流会はあっという間に済んでしまうが、私たちがこのような活動を行えるのも、協力してくれる夫や家族がいてくれるからである。他の土地へ行ってこそわかる自分たちの住んでいる町、漁業者の良さも再発見できたような気がする。

## 6. 波及効果

交流会後の反省会では、やって良かったという感想が次々に述べられ、自分たちの世界が広がった喜びでいっぱいであった。ほんのささいな交流かもしれないが、確実に婦人部活動に取り組む姿勢が変わってきたように思われる。今までは頭の中で固く考え、婦人部活動にどこか冷めていたところがあったように感じる。私たちだけで何ができるのか、などという意見がよく出されていた。それが交流会を始めて人と出会う楽しみが増え、話をする機会が多くなったことによって人とのつながりもでき、友人もできたことで婦人部活動にも意欲的に取り組める気概が出てきたようである。

また交流会を行い、違う土地の女性たちと接することで自分たちを振り返ることも出来るようになった。決して比べるわけではない。「海」や「漁業者」のことについて説明することによって、日頃の活動に誇りを持つことができ、自分たちを奮い立たせることもできる。また山間部の女性たちの「ゆとり」に触れたとき、自分たちにとって「ゆとり」とは何かを考える機会が持てた。いろいろな人たちと接することで相手の立場を思い、広い視野で物事を考えられるようになった。「男性だから」「女性だから」という考え方ではなく、お互いを尊重し助け合って活動を続けていきたいと考えている。

## 7. 今後の課題

私たちの西浦魚市場は小魚や安価の魚が沢山水揚げされる。地元で水揚げされるいろいろな魚の栄養価をもっと勉強し、知識をもって料理方法の研究を進めたいと思う。魚と聞いただけで敬遠されるようなイメージを一新するためにも魚のいちばん身近にいる私たち漁協婦人部が、消費者へのアドバイザー的役割を果たしていければと考えている。

また郷土料理であるニギスの団子汁を他地域の子どもたちにも食べさせたい。ニギスにこだわる訳ではないが、西浦という町をもっと多くの人に知ってもらい「魚」や「海」に関心をもってもらいたいからである。魚食普及と消費拡大という目的もあるが、私たちの命のもとである「海」の現状を知ってもらいたい。「海」が汚れると簡単には浄化できないことや、何が「海」を汚しているのか認識してもらいたい。私たちが研修会で魚を育てる森林の働きについて学び、山に木を植える漁業者の活動を知った。海だけ

を見ていた私たちにとって驚きとともに森林や山を守ってくれている人々への認識が変わってきた。私たち漁協婦人部にとっての交流が知り合う喜びだけでなく、水でつながる交流へと少しずつでも輪を広げていけたら、本当に根の深いものとなるであろう。皆様方のご指導を頂き協力しあい、活動が続けていきたいと思う。